

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 29 日現在

機関番号：32608
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：25770129
研究課題名(和文)イヴォ・アンドリッチの小説世界に関する研究

研究課題名(英文)Study on Ivo Andric

研究代表者

奥 彩子 (OKU, Ayako)

共立女子大学・文芸学部・准教授

研究者番号：90513169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果としては、まず、イヴォ・アンドリッチに関する一般読者向けの二編のエッセイ(「ノーベル賞作家の数奇な後生～イヴォ・アンドリッチ」「物語を紡ぐ名前」)を発表した。さらに、学術論文として、「The Naming of Characters in Ivo Andric's The Bridge on the Drina」を発表した。これは国際学会ICCEEuS幕張大会での口頭発表を大幅に加筆修正したものである。最終年度には共編著『東欧の想像力』を出版した。この書籍では特に「ユーゴスラヴィア文学」史の記述を試み、アンドリッチを含めたさまざまな作家をそのなかに位置づけた。

研究成果の概要(英文)：As results of the project, I published two essays dealing with Ivo Andric ("A peculiar life of Nobel prize writer : Ivo Andric" and "Names weave stories : Balkan peninsula"). I also published an article entitled "The Naming of Characters in Ivo Andric's The Bridge on the Drina." This is a substantially revised version of the paper presented at the International Council for Central and East European Studies IX World Congress. Finally in the last year of the program, I coedited the book Imaginations in Eastern Europe. In this book, I considered the perspective of history of Yugoslav literature, including Andric; and other writers.

研究分野：東欧文学

キーワード：バルカン 東欧 文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 「移動の世紀」と呼ばれる 20 世紀は、国家の枠組を超えた文学を多く生み出した。なかでも東欧は、多くの文学者が社会主義体制から欧米に逃れたことで知られる。しかし、東欧文学の特色でもある多言語性のゆえに、全体的な研究は困難であった。なかでも、バルカンの文学についての研究は、国内ではほとんど行われてこなかった。

(2) 以上の動向をうけて、ユーゴスラヴィアの亡命作家ダニロ・キシユ(1935-1989)についての専門的な研究を行ない、博士論文にまとめた。博士論文後の研究としては、共産主義体制下において亡命した東欧出身の文学者と、1989 年の体制転換以降に故国を離れた文学者との比較を通して、20 世紀文学を特徴づけていた「亡命文学」の意味を問い直し、「世界文学」の文脈に位置づけることを目指した。まず、主として北米に移住した旧ユーゴスラヴィア出身の作家の研究を行ない、さらに、理論的な研究の土台となる「世界文学」の概念と可能性について探るため、デイヴィッド・ダムロッシュ(ハーヴァード大学教授)に師事し、主著『世界文学とは何か?』を中心となって共訳し、刊行した。

(3) そのかたわら、東欧地域研究を牽引してきた柴宜弘を中心とする研究会を運営し、歴史学、社会学の研究者との議論を行った。研究会を通して、東欧という枠組みの可能性と不可能性について検討した。

(4) 体制転換前と後の東欧亡命作家についての考察、「世界文学」という理論的枠組みの研究を深めるなかで明らかになってきたのは、亡命文学から世界文学へと広がる方向性と、国民文学の強化へと収斂する方向性という、相反する二つの潮流の存在である。

(5) とくにボスニア・ヘルツェゴヴィナは、90 年代の過酷な内戦後の独立にともない、ユーゴスラヴィア文学から脱却し、独自の国民文学の歴史を生み出す必要性に迫られた。こうしてムスリム文化を重視する流れが強まった。一方、旧ユーゴ唯一のノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチの評価は下がった。ボスニアに生まれながら壮年期以降をセルビアで過ごし、セルビア方言で執筆したために、ボスニアを裏切ったとされたためである。サラエヴォ大学教授ムフシン・リズヴィチが書いた 600 頁超のアンドリッチ批判本『アンドリッチの世界に見るボスニアのムスリム』(96 年、サラエヴォ)はその代表である。アンドリッチ作品の評価をめぐる変遷には、「国民文学」をどのように構築するかという葛藤が深くかかわっている。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、アンドリッチ作品に見られる民族文化の混淆の考察を軸に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ文学がもつ「新しいヨーロッパ文学」の可能性、さらに、国民文学の収斂から世界文学が生み出される可能性を検討することにある。

(2) グローバル化の時代にあって、ナショナリズムが強化されるという現象はバルカンに限ったことではない。しかし、カトリック、ムスリム、正教徒が分断されて暮らしているボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、ナショナリズム強化のなかに多様な世界を見出そうと試みる以外に、国家として一体化する方途はない。本研究はこうしたアクチュアリティのある問題を扱いながら、二つの相反する潮流を結びつけるという世界文学の新しい試みの実践ともなっている。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナというヨーロッパの小国でイスラーム文化が中心となっている点に取り組むことは、従来のようなヨーロッパとイスラームという二つの文化圏の対立ではない、新しいヨーロッパ像を見出すことにつながる。

(3) 日本ではアンドリッチ研究は、栗原成郎、田中一生らユーゴ研究の泰斗により作品翻訳、作家紹介はなされているものの、本国の豊富な研究を反映したまとまった研究はまだなされていない。現代的な視点を確保しながら、ユーゴスラヴィア唯一のノーベル賞作家の作品世界に迫ることを目指す。

3. 研究の方法

(1) まず、作品の受容について把握をする。アンドリッチをめぐる状況について、リズヴィチ以外の批判の歴史的経緯を調べる。現地での資料収集のまえにインターネットを通じた資料収集を行い、現地調査をできるかぎり効率よく行う。

(2) 次に作品の読解を行う。とくに、「ボスニア三部作」と呼ばれるアンドリッチの主要小説群のうち、『ドリーナの橋』を中心に、アンドリッチ作品における登場人物の名前の検討を行う。

4. 研究成果

(1) 研究計画の初年度にあたる 2013 年度には、雑誌『図書』において、「物語を紡ぐ名前」と題して、バルカン半島の苗字の構造を、イヴォ・アンドリッチの『ドリーナの橋』を題材に一般読者に向けて説明するエッセイを発表した。これは 2016 年 3 月に岩波新書『世界の名前』に収録された。

(2) また、同年には、日本ペンクラブ主催の「セルビア詩人とのひと時」において、「セルビア文学の現状」と題した講演を行

った(11月、於日本ペンクラブ)。

(3)二年目にあたる2014年度は、アンドリッチ文学を「移動」との関わりから論じるエッセイ「ノーベル賞作家の数奇な後生～イヴォ・アンドリッチ」を一般読者向けに執筆した。これは2015年に出版された『柴宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』(明石書店)に収録された。

(4)最終年度には、現地における資料収集を行い(5月)国際学会The International Council for Central and East European Studies IX World Congress(8月、於神田外語大学)において「The Naming of Characters in Ivo Andrić's *The Bridge on the Drina*」と題した口頭発表を行った。

(5)また、国際学会での口頭発表をもとに加筆修正を行い、論文「The Naming of Characters in Ivo Andrić's *The Bridge on the Drina*」を『れにくさ』に発表した。この論文は、イヴォ・アンドリッチの『ドリーナの橋』が、第二次世界大戦中、ナチ・ドイツの占領下にあるベオグラードで執筆されたことに着目し、そのことが作品執筆にどのように反映されているかを、作中の登場人物の名前の分析を通して論じたものである。『ドリーナの橋』の登場人物の名前は、歴史上の人物の名前、実在した地元の人々の名前、そして、アンドリッチによって創作された名前の大きく三つに分類できる。登場人物の名前は、アンドリッチの歴史的正確さへのこだわりを示すとともに、ヴィシエグラードの民族的多様性を示すことに寄与している。その検討の過程で、アンドリッチがムスリムを貶めるイメージを恣意的に構築したという近年ボスニアで影響力の強い見方を再検討し、アンドリッチが19世紀に採集されたムスリムの民謡、伝承などの資料を重視して創作を行った過程の一端を明らかにした。

さらに、執筆時にまさに暴力に晒されていた人々の名前や生きざまを記すことは、占領下に沈黙を貫いたアンドリッチの、文学による抵抗の証でもあったことを明らかにした。

(6)2016年には西成彦、沼野充義とともに、共編著『東欧の想像力』を松籟社から出版した。東欧文学は、その多言語性ゆえに全体を見通すことが難しい。この本は、各地域言語の専門家がそれぞれの文学の歴史、主要作家の紹介を行うことで、「東欧」というゆるやかな括りによる、現代文学の見取り図を示すことを目的としている。内容目次は以下の通りである。

東欧文学とは何か? 問(はざま)の世界の地詩学を求めて

ポーランド[作家紹介]ヴィトキエヴィチ

/ シュルツ / ゴンブローヴィッチ等
チェコ [作家紹介]チャペック / フラバル / クンデラ等

スロヴァキア [作家紹介]フロンスキー / タタルカ等

ハンガリー [作家紹介]ケルテース / コンラード / ナーダシュ等

ユーゴスラヴィア [作家紹介]アンドリッチ / パヴィッチ / キシュ等

アルバニア [作家紹介]アゴリ / カダレ等

ブルガリア [作家紹介]ヨフコフ / ラディチコフ等

ルーマニア [作家紹介]エリアーデ / カルタレスク等

オーストリア [作家紹介]パッサマン / ベルンハルト / ハントケ等

東ドイツ [作家紹介]ミュラー / ヴォルフ等

イディッシュ文学

東欧からのドイツ人追放とドイツ人の故郷喪失をめぐる文学

東西統一後の東欧系ドイツ語文学 [作家紹介]ポプロフスキー / グラス等

南欧と東欧の交錯 トリエステそしてボリス・パホル

東欧文学とフランス語 [作家紹介]アゴタ・クリストフ

英語のなかの東欧系文学 [作家紹介]イェジー・コシンスキ

ラテンアメリカ文学と東欧

そのほかコラム

報告者の分担としては、いまは解体し、なくなってしまった「ユーゴスラヴィア」の文学史の執筆を試みた。現在では、各共和国ごとの文学史が主流を占めており、「ユーゴスラヴィア文学」はあたかも存在しなかったようであるが、20世紀において、「ユーゴスラヴィア」は文学空間としても大きな意味を持っていた。アンドリッチは、まさに、この「ユーゴスラヴィア」を体現する作家であった。文学史執筆に際しては、アンドリッチのほかに、重要な各作家を位置づける試みをおこなっている。そのほか、チョピッチ、キシュ、ウグレシッチ、イェルゴヴィチといった、旧ユーゴスラヴィア各国の作家紹介も執筆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Ayako OKU, "The Naming of Characters in Ivo Andrić's *The Bridge on the Drina*," 『れにくさ(東京大学現代文芸論研究室紀要)』第6号、2016、130-140頁、査読無。

研究者番号：

〔学会発表〕(計1件)

Ayako OKU, "The Naming of Characters in Ivo Andrić's *The Bridge on the Drina*," The International Council for Central and East European Studies IX World Congress, August 7, 2015, Kanda University of International Studies (Chiba City, Chiba).

〔図書〕(計3件)

奥彩子、西成彦、沼野充義編『東欧の想像力』松籟社、2016、320頁。

奥彩子、「物語を紡ぐ名前」、岩波書店辞典編集部編『世界の名前』、岩波新書、2016、40-42頁。

奥彩子、「ノーベル賞作家の数奇な後生～イヴォ・アンドリッチ」、柴宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』、明石書店、2015年、264-267頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥 彩子 (OKU, Ayako)
共立女子大学・文芸学部・准教授
研究者番号：90513169

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()